



ANNIVERSARY
20th
1994-2013

テザセン 2013 REVIEW

高校生が考える、みんなが笑顔になる方法。

デザセン(全国高等学校デザイン選手権大会)は、全国の高校生を対象に、人や社会を幸せにするためのデザインを毎年募集しています。

デザインって、具体的にどんなことをすればいいの？

そんな声が聞こえてきそうです。何となく難しいことなんじゃないかと考えているかもしれませんが、実は私たちは普段の生活のなかで、デザインに必要なプロセスを無意識のうちにやっているのです。

例えば、友だちの誕生日プレゼントを選ぶとき。

「お菓子づくりが得意だから、自分でお菓子をつくって持っていこう」

「最近話題の〇〇にしてみよう」など、いろいろあると思いますが、

どんなものを選ぶにしても「友だちが喜んでくれるかどうか」を一番に考えていますよね。

私たちは、プレゼントを渡す友だちが「どんな人」で「どんなものが好き」かなど、友だち本人のことをまず考えます。

その上で、こういうものなら気に入ってもらえそうだな、〇〇さんっぽいな、

などと考えながら、少しずつ範囲を絞っていきます。

さらに「他の人は何をプレゼントするのだろう」など周りの影響も考慮します。

無意識に選んでいるようで、実はいろいろなことを考えて、

それらのデータをもとにして、友だちに合ったプレゼントを選ぼうとしているのです。

こんな風に、いろいろ考えたり、段取りしたりすることが、デザインです。

人が何を求めている、どうすれば喜んでもらえるかを考える。

そして、自分自身もワクワクする。デザインは、すごくポジティブで、楽しいことなのです。

この「考えるプロセス」をきちんと身に付けられれば、社会のあらゆる場面で役立つ、大きな力になります。

たくさんの高校生にデザインを知ってもらいたくて考えた、「デザセン」というプレゼント。

みなさんからの「アイデア」のお返し、待っています。

CONTENTS

- 04 トピックス
- 06 入賞提案 12 チーム
- 18 入選提案 30 チーム
- 22 審査講評
- 26 入賞校の先生方の声
- 28 大会資料

QRコードから動画をご覧いただけます。



P.6～17にあるQRコードを携帯電話で読み取ると、各チームのプレゼンテーションを映像でご覧いただけます(バケットプランにご注意ください)。大会公式ホームページでは、過去大会で入賞した提案の内容もご覧いただけます。



TOPICS デザセンに寄せられた提案が次々に商品化・実現化！



デザセン2013 PEOPLE MAGNET TV (PMTV) 特別賞

『JJJプロジェクト』 ※ JJJ=Job, Joy, Junior

御殿場高等学校（静岡県）

デザセン2013でPMTV特別賞を受賞した御殿場高校の提案『JJJプロジェクト』の取り組みが、日本テレビ系列で全国放送されました。日本テレビ開局60年の特別プロジェクトPMTVは、「アイデアが世界を変える。カッコいい社会貢献」をキャッチコピーに、新たな社会貢献を創出させるプロジェクトです。『JJJプロジェクト』は、子どもたちが商店で仕事体験をすることで、地元内のコミュニケーションを図りながら商店街を活性化させ、その魅力を発信しようという提案。実際に地元店舗の協力を得て、高校生と小学生がペアでおこなった仕事体験の様子が全国ネットで紹介されました。

写真：実際に高校生と小学生のペアで、地元商店街のパン屋さんで仕事体験。お店の方からも、プロジェクトの可能性に期待の声。
放送日：2014年2月8日 10:30～11:25（日本テレビ系全国ネット）
ホームページ <http://pmtv.jp/> ※ 画像提供：日本テレビ



デザセン2012 優勝

『レシート日記』

伊東高等学校城ヶ崎分校（静岡県）

デザセン2012で優勝した伊東高等学校城ヶ崎分校の提案『レシート日記』が、昨年のプロトタイプ制作を経て、いよいよこの春に発売される予定です。大手文具メーカーが製作し、東京都内を中心に全国展開する大型雑貨専門店の店頭と並ぶ予定で、手に取って買い求めることができるようになります。第1弾の発売後は、大手旅行会社や大手百貨店向け『専用レシート日記』の企画も進行中で、目的や用途にあわせて様々なバリエーションへの展開が可能になりました。今後、ますます多くのシーンにあわせた商品化が期待されています。

写真：チームのアイデアをもとに商品を企画した、株式会社ネットワークプランの鈴木裕太さんから、仕上がりのイメージやコンセプトなどの説明を受ける3人（2012年当時）。最終的なデザインも決まり、作製部数やバーコードなどの細部を調整して量産体制に入ります。

このほかにも、「まくら投げのすすめ（2010準優勝／伊東城ヶ崎）」は伊東市で第2回大会が開催、「Sexchange Day（2013優勝／富士北稜）」の提案に大手企業から関心が寄せられ、「菌力（2013準優勝／東根工業）」のTシャツ商品化への期待（審査講評）が高まるなど、今後の展開にぜひご注目を！



デザセン2010 第三位

『ネガポ辞典』

北海道札幌平岸高等学校（北海道）

デザセン2010で第三位になった北海道札幌平岸高等学校の提案『ネガポ辞典』が、ますます好調な活躍を見せています。発表翌年の2011年6月にiPhone用アプリが開発された後は、2012年9月に大手出版社からの書籍化が実現、発行部数は11万部を数えました。その実績から、2013年10月には第2弾の『ネガポ辞典実践編』が、一般から公募したワードも加えて発行されました。アプリはAndroid版も含め30万ダウンロードを超え、『現代用語の基礎知識』でも「時代・流行」の「日本語事情」で紹介されるなど、ひとつの社会現象になっています。

『ネガポ辞典』実践編 著：ネガポ辞典制作委員会
出版社：主婦の友社 <http://www.shufunotomo.co.jp>
定価：本体1,000+税 ISBN 978-4-07-292534-8
ネガポ辞典 Facebook <http://www.facebook.com/Negapo>

デザセン2013 REVIEW

第20回 全国高等学校デザイン選手権大会 報告書

『Sexchange Day』

富士北稜高等学校 (山梨県)
渡邊紀子 (3年) / 川口智矢 (3年) / 梶原みな美 (2年) 指導教員: 菅沼雄介 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

自分と世界を見つめ直す日

私たちは、たくさんの「あたりまえ」に支えられて安定した社会生活を送っていますが、そんな日常の中で、自分の思考を停止させている高校生もいるのではないのでしょうか。成績を上げるためだけの勉強、核廃棄物の行き場がない原発、減り続ける子どもと増え続ける財政赤字など、「あたりまえ」の延長線上には明るい未来は見えません。いま、私たちに求められているのは「あたりまえ」から離れてみることに問題解決に向けた希望があるのです。そこで、いつもとは違う感覚を呼び起こすために、『Sexchange Day』を提案します。年に1日、男女の制服を交換して1日を過ごし、身近な常識である「男らしさ」、「女らしさ」から離れてみることで、「あたりまえ」が消えてあるがままの社会と自分が浮かび上がり、リアルな世界を見据えて意志と覚悟を持った人が増える。他人の判断を尊重し、多様性を持った寛容な社会が生まれ、いろいろな問題が解決できるのではないのでしょうか。



渡邊紀子
Noriko Watanabe

私はあたりまえの世界のなかで、生きているのだなと実感していました。一度しかないこの人生をもっと常識に沿って生きるのではなく、自分らしく生きたいと思ったのは、デザセンがあったからです。辛いことも楽しいこともありましたが、デザセンに出場してよかったです。



川口智矢
Tomoya Kawaguchi

案を考えている時は、山形に行けたらいいねという感じがした。山形に行ける時はまさかと思ったが、やるぞとも思った。シナリオづくりでは本当に大変で、言い合いになることもあった。考えがひとつに集まらない時は、原点に戻ることが大事なんだと思った。高校生らしいとよく言われたけど、「デザイナー」としてやれたつもりだった。この経験を自信に変えて今後も挑戦していきたい。



梶原みな美
Minami Kajihara

私は先輩方のお手伝いという形での参加でしたが、こんなに素晴らしい結果を残せてとてもよかったです。本番は緊張しすぎて右も左もわからない状態でしたが、全力を出せた発表でした。今思えば、ああすればよかった、こうすればよかったと思うところも多々ありますが、それを踏まえても自分の成長につながる大きな一歩だと思っています。ここで足を止めず、また一歩先へ進んでいきたいです。



『男女 CHANGE DAY』

明知高等学校 (韓国 | ソウル市)
イム・ヨンウ (2年) / ゴ・ミンソ (2年) / パク・スヨン (2年) 指導教員: イ・ソジョン 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

お互いを理解する男女チェンジデー

韓国では、デートで食事をしたら女子はおごってもらうのがあたりまえと思うことが多く、割り勘でけんかになることもしばしば。「女子も軍隊に行くべきだ」とか、「男子なら荷物くらい持ってよね」とか、服装のことで文句を言い合ったりします。そんな時、「易地思之 (相手の立場になって考える)」という四字成語を思い浮かべました。男女の立場を逆転させて、相手の立場になって考えてみてはどうでしょう。エイプリルフールやバレンタインデーのように、『男女 CHANGE DAY』を決めて、男子と女子が入れ替わって生活してみる。男子は家事全般や妊婦体験、女子は兵役体験や食事をおごったり荷物を持ってあげたり。街頭調査でも、多くの人がやってみたいと答えてくれました。フラッシュモブ (SNS などにより集まった人で突発的なイベント) を仕掛けて、もっと多くの人に参加してもらえれば、男女の問題を楽しみながら解決でき、けんかも男女差別もなくなるでしょう。



イム・ヨンウ
Lim Yong-Woo

大人が高校生のアイデアに耳を傾けるといところがよかったです。そしてそのアイデアを聞くだけでなく、実現の方向性を提示してくれることに感動しました。大会の期間中、チームワークの重要性を学ぶことができました。特にいちばん意味があったのは、言葉や文化が違っててもそれに関係なく、みんなと親しくなれたことです。この大会を通じて自分自身も成長することができて嬉しく思っています。



ゴ・ミンソ
Zo Min-Seo

自分たちのアイデアを通じて、社会の発展に役立terという点が嬉しいです。また、プレゼンテーションの準備を通じて、ほかの人に対する配慮と、共に協力していくことを学びました。サポートスタッフのみなさんや先生、事務局の方々のおかげで無事に大会を終わらせることができて、本当に感謝しています。高校時代に、このような意義深い大会に参加することができて、とてもよかったです。



パク・スヨン
Park Soo-Young

思ったより大会の規模が大きくて最初は慌てましたが、韓国代表として参加するという大きな責任を感じました。決勝大会では最高のプレゼンテーションを見せることができるように、実際の会場と同規模の講義室で練習したおかげで、本番では緊張しないで発表することができました。大会の準備ではたくさんの困難がありましたが、自分の限界を乗り越えられた価値のある時間でした。

『菌力 ~ Virus Power ~』

東根工業高等学校 (山形県)
海鋒千愛美 (3年) / 菅原利早 (3年) / 菊地由輝 (3年) 指導教員: 長澤英一郎 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

菌の力で楽しい生活

「菌」「ウイルス」「バクテリア」からは、「増殖」「感染」など悪いイメージしか思い浮かびませんが、これらをよりリアルに見つめ、よい意味で世界を感染させるのが『菌力』です。私たちの生活に欠かせない「衣・食・住」のそれぞれに菌を感染させ、世界中に繁殖させます。「衣」では、伝統的な紋様のように「菌柄」をデザインして、世界共通のファッションをつくります。「食」では、食品ラベルに表記される賞味期限を「賞味菌限」に変えて菌の繁殖率を示すことで、まだ食べられるのに捨てられることを防ぎます。「住」では、高温多湿で増殖する「菌時計」を置くことにより、子どもにも直感的に環境の変化がわかるため、住環境の改善につながります。こうした「菌」の力で世界を結びつけ、環境問題や世界平和を実現するために、「キンドル」というアイドルユニットを結成して、自らがウイルスとなり世界中を感染させます。



海鋒千愛美
Chiami Kaihoko

最初は「菌って気持ち悪いな～」というところから始まりました。先生に決勝大会進出の事を聞き、とてもびっくりしました。当日までの1週間はみんなで放課後に残って、プレゼンの練習や準備をしました。話し合いも何度もしました。大変でしたが、たくさんの方が協力してくださったおかげで、準優勝という好成绩を修めることができました。先生方をはじめ、みなさん本当にありがとうございました！



菅原利早
Risa Sugahara

「キンドル」はメロディーも、歌詞も、衣装も、踊りも、すべて1からつくり上げました。どれも沢山の方からサポートしていただき完成した力作です。「キモイから嫌、生活をハッピーにするものに！」結果、質疑応答でつまづいたものの、会場からは拍手の嵐をいただきました。私の弟は幼稚園児ですが、今でも「キンドル」の歌を口ずさんでくれます。デザセンを通じて得たものは数えきれません。ありがとうございました。



菊地由輝
Yuki Kikuchi

去年に高校生審査員としてデザセンを見なければ、まさか自分が決勝まで残ることができるなんて思わなかったのも、とても嬉しかったです。『菌力』はもともと私が牛タンを部屋に放置してカラフルなカビを生やしたのがきっかけで、「菌」というテーマが決まりました。本格的に練習をはじめたのが本番の1週間前くらいからで、最後の3日間で完成させて、2つも賞をもらえたのでよかったです。



『Photo しり撮りゲーム ~フォトリ~』

羽咋工業高等学校 (石川県)
長谷川翔一 (3年) / 磯見稚子 (3年) / 大家彩 (3年) 指導教員: 向井章 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

写真で新しいコミュニケーション

コミュニケーション能力の低下が悩ましいなか、最近では友だちや知人、同僚だけでなく家族と会話する機会さえも少なくなっています。私たちは、写真を使ったしりとりゲーム『フォトリ』によって、コミュニケーションを深めることを提案します。撮ったままになっているスマホやデジカメなどの写真を使い、写真でしりとりをしていきます。好きな写真を10枚選び、しりとりをしながら全部を出し切ったら勝ちです。写真に写っているものだけではなく、色や英語に訳したものでOK。1枚の写真のなかにもたくさんの言葉が隠れているので、それらを探し出すところがこのゲームのミソなのです。『フォトリ』ならではの特別ルールとして、最後に「ん」がついた場合はもう1枚写真を出せたり、言葉が出てこなかった場合に「ワードチェンジ」することができます。「写真」「思い出」「会話」など人と人をつなぐ、新しいコミュニケーションツールとして活用してください。



長谷川翔一
Shoichi Hasegawa

僕は人にもものを伝えることや、教えることが苦手でした。シナリオ作成ではみんな僕の意見を聞いてくれました。プレゼンの練習では、はじめは自分でもびっくりするくらいひどく、見るに堪えなかった話し方や立ち振る舞いでしたが、練習を重ねるごとに、何かが吹っ切れ、納得できるプレゼンをすることができるようになりました。僕たちが三位に入賞できたのも毎日頑張り、練習してきたみんなの協力のおかげです。



磯見稚子
Wakako Isomi

今回、デザセンに参加させていただいて、本当に貴重な体験ができました。大勢の方々前で発表するのは、すごく緊張しました。ここまで来るのに色々はじめての事を体験して、苦勞して、何度も何度もやり直したりしたけれど、ここまで来られて本当によかったです。もうこのような体験をすることは二度と来ないでしようし、本当に貴重な体験でした。私のなかの何かが成長できたのではないかと思います。



大家彩
Aya Oie

私は今回デザセンにはじめて参加させていただきました。簡単なようにみえて、実は難しい『フォトリ』というゲームを7分間でまとめるのはとても大変でした。考えているなかでたくさん衝突がありましたし、逃亡する人も出て、シナリオをまとめるのにだいぶ時間がかかりました。プレゼンを見て、学生スタッフさんが「フォトリしたよ～」と言いに来てくれたのは嬉しかったです。貴重な体験、ありがとうございました！



『食人図鑑』

淀商業高等学校（大阪府）
兼本沙来（3年）／久間梨沙（3年）／寺川夕月（3年） 指導教員：安東裕二 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

子どもから大人まで楽しみながら学べる食育図鑑

偏った食生活や食べ残しが深刻化し、日本では子どもの10人にひとりが肥満、年間800万トンの食品が捨てられています。食育基本法が制定されて8年が経っても、まだその効果は表れていません。わかりにくい食育を簡単に楽しく学べ、人への感謝の気持ちを育てる『食人図鑑』を提案します。「人とのつながり」「栄養知識」「環境問題」の3つをテーマとしており、生産者や水道局など「食」に関わる様々な「人」の声を聞くことで感謝の気持ちが生まれます。また、食品や栄養に関するクイズで知識を深めて好き嫌いをなくします。さらに、フード・マイレージをもとにしたゲームで環境問題を見つめる心を育てます。好き嫌いがあると「鬼」が登場して、子どもの恐怖心を呼び起こします。甘やかす親に代わって、「子どもの心のなかに鬼を育てる」ことが大事だと考え、食育ならぬ「鬼育」を盛り込み、「もったいない心」と「感謝の気持ち」を育てるのが『食人図鑑』なのです。



兼本沙来
Sari Kanamoto

今回、このデザセンに出場させていただき、とても感謝しています。緊張などであまり作業が進まず、多くの先生に迷惑をかけました。大会では大学生賞と市民賞を受賞することができ、ひとりでは何もできないこと、多くの人に支えられていることを再度学ぶことができました。デザセンで学んだことを忘れず、今後に活かしていきたいと思います。



久間梨沙
Risa Kyuma

デザセンのホームページで決勝進出を知りました。喜びの反面、就職試験との両立や学校行事との重なりもあり不安でしたが、先生方やクラスの友だちなどたくさんの人に支えられてひとつのものをづくりあげたことで、今までにない達成感を味わうことができました。また、県外のチームと話すことで新たな発見もあり、貴重な経験でした。これを励みに残り少ない高校生活も楽しみます！



寺川夕月
Yuzuki Terakawa

今回、このデザセンに出場し、いろいろな人と関わることができ、そしてこの3人のチームで協力し合い、途中様々なことがありましたが、先生や周りの友だちにも手伝ってもらい、大学生賞と市民賞を受賞することができました。一生懸命頑張ったかいがあります。この経験を活かしてこれからも日々いろいろなことに活用していけたらいいと思います。

『一皮むける旅』

有田工業高等学校（佐賀県）
高井良未波（3年）／田中彩菜（3年）／田中舞（3年） 指導教員：東加代子 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

ひとり旅でコミュカアップ！

自分の考えがうまく伝えられず、自分に自信が持てない「コミュ障」という言葉が話題になっています。学校や限られた地域で限られた人としか関わりを持たない日常では、コミュニケーション能力は身につけません。日常の枠から飛び出し様々なことを経験し、人との関わりから逃げず自分を変えていく「一人旅」は、人生の節目となります。私たちが提案する『一皮むける旅』では、旅人＝「ビューパ（さなぎ）」、ホームステイ先＝「ホスト」と呼びます。現状に不安や不満を持つ「ビューパ」のリクエストと、手伝いや話し相手などを求める「ホスト」のニーズをマッチングさせます。組み合わせが決定すると事務局から「旅キット」が届き、スケジュールに沿って開く「試練カード」や目標が書かれた「ビューパズカード」などにより人と関わりを持てるように、旅がコーディネートされます。旅先の様々な出会いや過ごした時間が、「皮」をむくステップになるのです。



高井良未波
Minami Takaira

私にとって、念願の決勝進出でした。「絶対優勝しよう！」という意気込みで、なりふり構わずプレゼンの準備に没頭しました。今振り返ると、自分でもよく頑張ったな、と思います。悔しい思いもしましたが、徹底的に努力できたことが、自信になりました。進学も決まり、デザセンを機に、私の人生に弾みがついたような気がします。チームサポートのおふたりに、いつか会える日を楽しみにしています。



田中彩菜
Ayana Tanaka

私たちは、自分に自信が持てない人へ『一皮むける旅』を提案しました。その企画をつくり込むなかで、初対面の人に取材をしたり、写真や動画を撮らせてもらったりと、数多くの試練がありました。いつもうまくいくとは限りませんでしたが、気がつくと私自身がこの大会準備で、まさに『一皮むける旅』を経験していました。自分の考えをきちんと伝えて、最後までやり抜く、という旅だったと思います。



田中舞
Mai Tanaka

プレゼンテーションをつくり込むまでの間に、新しい人との出会いや、はじめての経験をすることができました。そのどれもが、普段の学校生活では考えられないような、充実したものでした。大会では、チームサポートの方や、他のチームの人と友だちになれました。人見知りな私でも、あんなに自分の考えが言えて、積極的に動けたということが大発見です。デザセンの日々を、一生忘れません。

『JJJプロジェクト』 ※ JJJ=Job, Joy, Junior

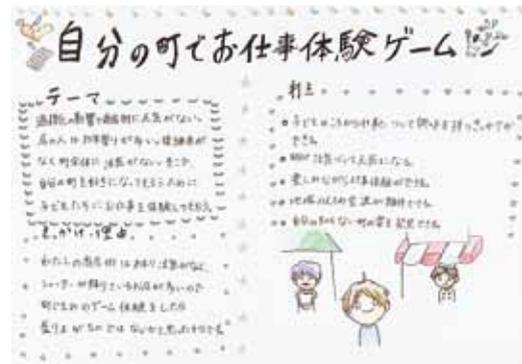
御殿場高等学校 (静岡県)
小見山友希 (2年) / 勝又暖乃 (2年) / 内野冴香 (2年) 指導教員: 坂本泰三 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

子どもたちが街を元気にするプロジェクト

過疎化や少子高齢化などの影響により、活気のない商店街が増えています。私たちは将来を担う子どもたちに注目し、子どもたちの元気で街を元気にする「JJJプロジェクト」を提案します。子どもたちが仕事体験して街を知り、愛着を持って自分たちの街を好きになっていくことで、街を活性化させます。学校・商工会議所・地域の連携を図りながら、授業で町内事前学修や商店街見学をおこない、学校行事の一環として仕事体験をします。子どものうちから職業意識が身につくだけでなく、子どもからお年寄りまで参加することで地域の交流が盛んになり、街を自慢したくなります。このプロジェクトがたくさんの街に広がれば、たくさんの街が元気になっていくでしょう。インターネットなど間接的なつながりが増えている現代だから、こうした直接人と触れ合うことが必要だと考えています。自慢できる自分たちの街、かけがいのない場所を自分たちで守っていきましょう。



小見山友希
Yuki Komiya

学科の行事や課題、文化祭の準備、テスト勉強と合わせてデザセンの準備をしました。1ヶ月半、正直とても辛かったです。授業が終わった後に集まり、遅い時は夜9時まで残り寝不足でした。でも準備期間はギリギリで足りなくなって、いつも追い込まれていました。チームワークがまとまらない、苦しい時もありました。もう少し準備期間があれば本番はもっといいプレゼンができたのではないかと思います。



勝又暖乃
Nonno Katsumata

応募は学校の授業の一環でした。二次まで通ると思っていませんでした。準備期間はとても大変でしたが、チームで協力し進めることができました。波乱の日々でした。本番では自分が考えていた以上に緊張してしまいましたが、ハプニングもあったなか、よいプレゼンができてよかったです。ありがたいことに賞もいただき、企画が進められるので、これから私たちの商店街について学んでいきたいです。



内野冴香
Sayaka Uchino

審査員がいる前でプレゼンテーションするのがはじめてだったので凄く緊張したけど、堂々と発表することができたのでよかったです。私たちが発表した内容を審査員に褒めてもらえて、とても嬉しかったです。この内容を実現させるのは難しいことかもしれないけど、私にできることをしていきたいと思います。デザセンの決勝大会で、私の発表をすることができてよかったです。

『マネージャー部』

東大和高等学校 (東京都)
高橋加梨 (2年) / 中村凧 (2年) / 石井美貴 (2年) 指導教員: 櫻田万里 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

部活動と社会を変えるマネージャーの力

部活動に欠かせないマネージャーの存在。部員の数が多い部ではマネージャーの負担も大きく、日々の疲れがたまって限界という人もいます。そんなマネージャーのために、精神的にも肉体的にも支えになる「マネージャー部」をつくりたい。マネージャー部では、選手を支えるマネージャーを支えるためのマネージャーを各部に派遣します。また部活動だけではなく、地域での活動にも参加して、祭りの裏方や街の美化活動、子どもたちとの触れ合いなどのボランティアを通して、地域と高校とのつながりを生み出します。マネージャー部では、つながることと適切な情報把握を大切にしながら、地域を活性化していきます。災害時の復興活動では、ガレキ撤去作業には運動部、情報通信復旧にはパソコン部、炊き出しや食糧配給には家庭科部など、必要とされる部員を派遣していきます。このようなマネージャーの力で、人とつながり支え合う社会を実現させます。



中村凧
Nagi Nakamura

学校の美術の授業でデザイン選手権というのを知り、授業として参加しました。最初は何をやっていいのかまったくわからず手こずっていましたがやっているうちに、どんどんアイデアが出てきて楽しくなってきました。全国に行けるとは思っていなくてすごびっくりしたけれど、全国に出る限りは一生懸命頑張ろうと思いました。大会当日は焦りや緊張があったけれど、とても楽しかったです。



石井美貴
Miki Ishii

デザセンに参加して、最初は不安しかありませんでした。もともとこんなに大きな大会に参加すること自体が初めての経験だったので、緊張しかありませんでした。準備期間の1ヶ月半がとても短く感じました。しかし実際に山形へ行って大学生やたくさんの方に応援してもらい、本番をとても楽しく終えることができました。今ではとても貴重な体験をしたと思いました。本当にありがとうございました！

『にやるばむ』

六郷工科高等学校（東京都）
古屋有公菜（3年）／カーン玲菜（3年）／加藤恋（3年） 指導教員：廣川賢 教諭

落ち込んだ日々をにやっ飛ばせ！

いやなことや辛いことで落ち込み過ぎて、もう何もしたくないと思い、周囲に迷惑をかけることがあります。そんな時に、やる気が出て落ち込み過ぎを防止するのが『にやるばむ』です。日常の様々な幸せを記録して、いつでも「にやにや」思い出し、落ち込んだ時には幸せに気づかせてくれるスマホアプリです。特徴は、「記録して見返す」アルバム。どんな小さなことでも、自分によいことがあったら記録されアルバムになります。その幸せを繰り返し見返すことで、前向きになることができます。積み重ねた幸せから、これから積み重ねる幸せを感じられると、落ち込み過ぎも防止できます。また、他の人の幸せを見ることにより、自分も「にやにや」することができます。そうした幸せにはスタンプをつけて、お互いの幸せを共有しながら「にやにや」が広がる。自分が幸せな気持ちになれば、周りにも優しくできるようになります。世界の幸せは、一人ひとりの幸せから。



プレゼン動画を
ご覧ください。



落ち込むこと自体は悪くない。落ち込んだからこそ何か得ることもあります。でも、落ち込み過ぎると自分も周りも良い気持ちができなくなってしまいます。



古屋有公菜
Yukina Furuya

今回、決勝大会という大きな舞台に立つことができました。人や社会が幸せになるものと考えて、案を何度も練りなおし、先生や仲間と一緒に磨き上げていくなかで、授業だけでは学べないデザインの難しさや楽しさ、人を思うことの大変さなど、たくさんことを学びました。先輩たちの結果を越えることができず悔しさはありますが、学んだことを生かし『にやるばむ』も大事に育てたいと思います。



カーン玲菜
Reina Khan

私は、全国という舞台に立つのはデザインをはじめででした。プレゼンテーションを準備する段階で、私は相手にどうしたら『にやるばむ』を伝えることができるのかを一番考えました。練習もたくさんして、舞台上に立った時には100%の力を出すことができました。デザインに出場して、デザインは型にはまっははいけないということも学び、とても貴重な経験をすることができました。



加藤恋
Ren Kato

デザインに参加して、辛いことや悔しいこともたくさんありました。受賞することができなくて、応援してくれた人たちに申し訳ないと思いました。しかし、どんな時も支えてくれる人たちがいたから、あの場所に立てたのだと思います。仲間とともに戦った今回のデザインをいつまでも忘れることなく、誇りに思っ、これからも意識を高く持ち、どんなことにもチャレンジしていきたいです。

『持ち物アルバム』

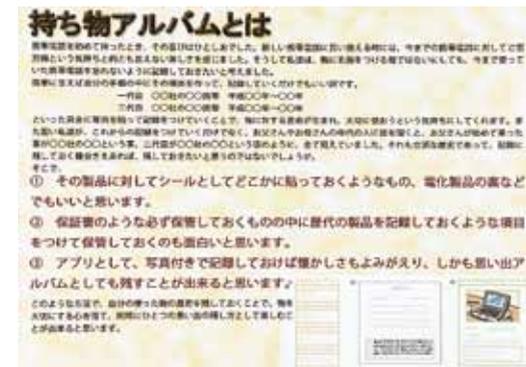
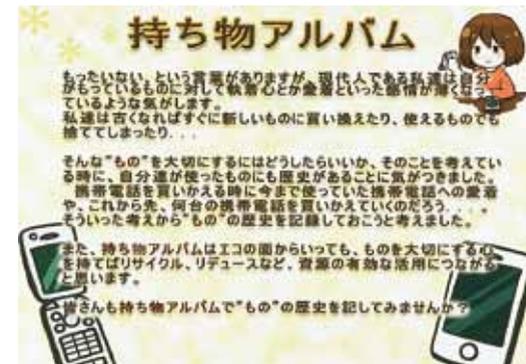
伊東高等学校城ヶ崎分校（静岡県）
行田麻衣（3年）／飯田すみれ（3年）／善積早紀（3年） 指導教員：大津忍 教諭

物との思い出を蘇らせるアルバム

例えば、誰もが持っている携帯電話。あなたの携帯は何台目ですか？ はじめて携帯を持った時の気持ちを覚えていますか？ 今の私たちは、飽きてしまったり新しいものがほしくなったりして、簡単に物を買って替えてしまいますが、それでいいのでしょうか。私たちが使ってきた持ち物は、一緒に人生を歩んできた大切な友だちです。『持ち物アルバム』では、1台2台ではなく「代」を使うのが最大のポイント。愛着のある持ち物について歴代順に、エピソード、写真、機種名、使用期間、感想などを記録しておけば、知らず知らずのうちに人生の節目節目で持ち物を買って替えていることもわかってきます。形はどうあれ記録を残すことが大事なので、市販のアルバムを使ったり、ノートに写真を貼るだけでもOKです。また、取扱説明書や保証書にメモを書いておくのもひとつの案です。大切にしてきた持ち物の思い出を残しておくことは、物を大切にしようという気持ちにつながります。



プレゼン動画を
ご覧ください。



飯田すみれ
Sumire Iida

前回大会の先輩たちの活躍に、私たちは大きな衝撃を受けました。そのため出場が決まった時はプレッシャーを感じずにはいられませんでした。積み重ねてきた練習と現地のスタッフの方々への支援のおかげで、悔いのないプレゼンをすることができました。協力してくださったみなさま、本当にありがとうございました。みなさん、ぜひ思い出を大切にしてください。



善積早紀
Saki Yoshizumi

はじめてのデザイン選手権で、大勢の前でのプレゼンがしっかりできるかが不安でしたが、先生やチームのメンバーとの練習を何回も重ねていくうちに、ここはこうした方がいいかもしれないと自分なりに工夫する余裕が生まれ、本番もあまり緊張せずにやりきることができたと思います。今後の自信につながる貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

『家族日記』

静岡県立科学技術高等学校（静岡県）

遠藤瞳（2年）／清彩華（2年）／中野萌子（2年） 指導教員：藤井邦光 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。



そこで録画したいのが・・・



家族日記が何をもっとかして



家族の絆を深める交換日記

家族と過ごす時間が減って、コミュニケーションが少なくなっている家族のために、交換日記アプリ『家族日記』を提案します。ひとつの日記を家族で共有し、順番に回して日記をつけたりコメントを書き込んだりします。面と向かって言えないことを書き、思い出を共有し保存していきます。日記では「今日の出来事」のほかにも「教えて○○」などの項目があり、家族同士で質問することができます。プロフィール機能では、それぞれの身長・体重や趣味などを記録しておき、家族年表機能では誕生日や旅行に行った日などを記録して家族の歴史を振り返ることも。『家族日記』は単にアプリ内だけのコミュニケーションではなく、家族の関わりを深めるきっかけになるものです。日記を続けていくうちに、家族の知らなかった部分を見つけたり、これまでの家族の歴史を振り返ることができて、家族への感謝の気持ちも生まれ、家族の思い出も守ることができます。



遠藤瞳
Hitomi Endo

デザセンの決勝に出場したことは、とても貴重な経験でした。普段気づかなかったことに気づくことができ、仲間と一緒にデザインすることや、プレゼンで伝えることの大切さや難しさを知ることができました。自分の想いを最後まで伝えきれなかったのは悔しかったけれど、いろいろな人と関わることができ、自分の知らなかった部分が見えて、充実した時間を味わえたことに感謝しています。



清彩華
Ayaka Sei

決勝に出場することになった時は驚きと、大勢の人の前でプレゼンをするという不安しかありませんでした。リハーサルの時も緊張で、頭が真っ白でした。でも、そのあともプレゼンの練習やスタッフの人たちからアドバイスをもらっていくうちに、自信ができました。本番では、緊張することなく堂々と話すことができました。人前で自分たちのアイデアをプレゼンすることができ、いい経験になりました。



中野萌子
Moeko Nakano

二次審査が通ったとわかった時、決勝大会に行くという驚きと、プレゼンに対する不安な気持ちが同時に湧き上がりました。本番当日は、会場が満席になるほど大勢の人がいて緊張しました。それでも、練習の時より堂々とできたと思います。デザセンでは、今までしたことのない体験ができ、自分にとってとてもいい経験になりました。デザセンでの経験を生かして、これからも頑張りたいです。

『QRコードの新世界』

ホンチョン

洪川高等学校（韓国 | 龍仁市）

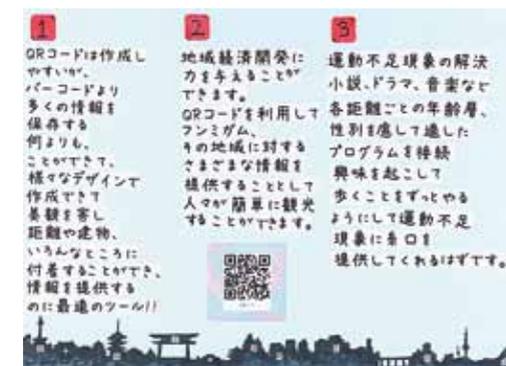
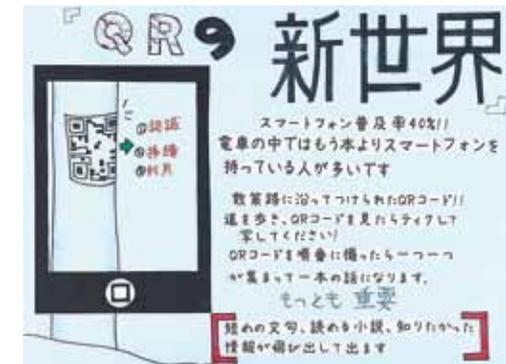
キム・スンヨン（2年）／パク・サンア（2年）／ノ・ヨンウン（2年） 指導教員：カン・ナムイ 教諭



プレゼン動画を
ご覧ください。

QRコードが観光を変える

普及したスマートフォンを活用するために、『QRコードの新世界』を提案します。活用例のひとつ「QRコードの散歩路」では、設置してあるコードを順番に読み込んでいくと、一連のオーディオブックや音楽、物語を楽しむことができます。自分の年齢やジャンルなどを登録することで、好みにあった情報を選択することができます。ここでは「運動効果」が期待され、面白い読み物や好きな音楽を聴きながら、運動につなげることもできます。別の活用例「QRコード旅行ガイド」は、歴史やショッピングなど様々なテーマのコースを案内するシステムです。旅行先の空港や駅、ホテルに着いたら、興味のあるテーマを設定すると行き先までの地図や説明が提供され、地域独特の宝探しのヒントも現れます。ここでは「地域活性化」の効果も期待することができます。このようにQRコードは身近で簡単につくることができ、しかも経済的なので、大きな効果が期待できるのです。



パク・サンア
Park Sang-Ah

こんな大きな大会で発表するのははじめてで、とても心配でしたし緊張もしました。しかし、準備をしながらいろいろな経験をし、たくさんの人たちと出会い、無事に大会を終わらせることができました。3泊4日という短い時間でしたが、いろいろなことがありました。まだ韓国ではデザセンがあまり広く知られていませんが、これからもっと知られて両国がもっと交流するきっかけになったらいいと思います。



ノ・ヨンウン
No Young-Woon

3泊4日で日本に行くということが、とても楽しかったです。最初は親しくなるか心配していたスタッフともすぐ仲よくなって、本当に楽しい時間を過ごしました。「高校1,2年の時にも参加していたらよかったのに」と思いました。大会を兼ねて休暇に行ってきたようで、すべてがよかったです。このような思い出をつくってくださったデザセンに感謝します。

『巻物 Oh, Yes!』

北海道札幌平岸高等学校（北海道）

宮嶋風花（3年）／鈴木優奈（3年）／坂本奈々美（3年）

江戸の商人たちが、人を思いやり人間関係を円滑にするために築きあげた行動学「江戸仕草」。この江戸仕草を巻物にしたため、外国人や現代の日本人に見てもらい、古きよき「思いやり」の心を知ってもらおうとて、平和で安全な社会をつくることができます。

『おバトル!!!』

宮城県工業高等学校（宮城県）

吉本銀次（3年）／佐竹祐保（3年）／荒風薫（3年）

商店街を利用した新感覚の買い物ゲーム『おバトル!!!』を考案しました。2～3名でチームをつくり、地域で配布されたチラシを参考に、買い物で作戦会議をおこないます。商店街の買物をきっかけに、人と人との交流が増え、地域全体の活性化を促します。

『今、帰りたい仮設住宅』

西目高等学校（秋田県）

前川絢香（2年）／鷹島瑞恵（2年）

誰もが「帰りたい」と思える仮設住宅を提案します。閉塞感を感じやすい仮設住宅の限られた空間を効率的に利用し、自然素材や明るい色を取り入れた家具や、便利グッズを完備します。このインフラを整えることで住人の精神的な負担を軽減します。

あ〜す

『地球くん』

東根工業高等学校（山形県）

大江礼華（3年）／保科有佳（3年）／齋藤礼奈（3年）

環境についての法律「環境法律」を提案し、環境法律について学べるテーマパーク施設を考案しました。人類が避けて通れない環境問題も『地球くん』があれば、遊び楽しみながら学ぶことができ、環境問題に対する一人ひとりの意識を高め、日本の環境保善につながります。

『片手でつかもう思いやりの心』

会津工業高等学校（福島県）

稲本裕基（3年）／藤田夏南（3年）／星博堯（3年）

人を思いやる気持ちを忘れないための「思いやり訓練」を提案します。身体の不自由な人の生活を実際に体験し、点字ブロックや優先席の必要性について学びます。体験し理解することにより、日常生活の中で率先して思いやりのある行動を実践できるようになります。

『お死らせくん』

埼玉県立芸術総合高等学校（埼玉県）

石川智生（2年）／片山愛菜（2年）／千田桃葉（2年）

『お死らせくん』に登録すると、登録した故人から連絡が届き、友人の死を知ることができます。SNSだけの交流で気づき難い死の別れをいち早く知ることができ、さらに遺族へ返事を送ることができるので、最後まであたたかいつながりをつくることができます。

『かいしんぼ』

川崎総合科学高等学校（神奈川県）

松川友美（3年）／橋本垂季（3年）／田村康介祐（3年）

誰もがあたたかい気持ちで寄り添える、新しいお墓のあり方を考案しました。墓石の代わりに桜の木を植えることで、お墓にある近寄り難いイメージを取り除きます。春には桜を囲み、故人を振り返りながら家族団楽の場所として特別な時間を過ごすことができます。

『エコ電』

川崎総合科学高等学校（神奈川県）

結束友香（3年）／小島理沙（3年）／河野友紀（3年）

自然と電柱を組み合わせた『エコ電』を考案しました。電柱に植物を生やすことで、コンクリート色の町に自然と緑が増えます。また、電柱にソーラーパネルを設置することで、夜の町を日中の光で明るく照らし、町の治安改善にもつながります。

『new! 添加物成分表』

藤島高等学校（福井県）

中串公香（2年）／西野涼希（2年）

現代の食料品は価格や保存性を重視するため、人間の身体に害のある添加物を含む食品が多く存在しています。『添加物成分表』を表示することで、誰でも身体によい食品を簡単に選択でき、さらに製造側も健康を重視した優しい食品開発を心掛けるようになります。

『七日間の生き残り戦争』

伊東高等学校城ヶ崎分校（静岡県）

穴澤なな子（3年）／行田麻衣（3年）／藤本絵里菜（3年）

都市部での災害時など万が一に備え、「命」をかけた生き延びるための部隊を組織し、防災訓練を町内や学校単位で実施します。明確な役割分担をして、災害を想定した訓練を継続的におこなうことで、災害時に町内全体で助け合い、みんなが無事に生き残ることができるのです。

『進化する家』

伊東高等学校城ヶ崎分校（静岡県）

藤本絵里菜（3年）／善積早紀（3年）／飯田すみれ（3年）

自分のオリジナルの家を自由自在に建てられる『進化する家』のベースとなる構造体は、「断熱材」と「アルミ」でつくられています。簡単にジョイントでき組み立てられるため、ライフスタイルに応じて部屋を自由自在に変化させていくことができます。

『車イス温泉』

伊東高等学校城ヶ崎分校（静岡県）

本間愛（2年）／田中美沙（2年）／坂本寧々（2年）

車イスでの旅館やホテルの入浴は不便なものです。そんな悩みを一掃できる、『車イス温泉』を考案しました。車イスに乗ったまま湯船に入れるので、介助者がいなくても自由に入ることができるため、身体の不自由な方でもゆっくり温泉を楽しむことができます。

『ランチョンマット Project』

神戸市立科学技術高等学校（兵庫県）

黒川優希（3年）／箕浦智美（3年）／尾関由香（3年）

食事の時間を利用して、食について話し合ったり考えたりすることができるランチョンマットを考案しました。マットには栄養バランスや、食事のマナーがデザインされ、大人も子どもも美味しい食事を楽しみながら食について学ぶことができます。

『有名建築 + Pet』

神戸市立科学技術高等学校（兵庫県）

山岡佳未（3年）／松本葵（3年）／大槻美佳季（3年）

『有名建築+Pet』は、「建築物」と「ペット」の魅力を一度に楽しめる新しい「ペットハウス」です。これを使えば、どちらかにしか興味がなかった人も、それぞれ興味をもちはじめ、一石二鳥で楽しむことができます。

『迷える子羊ちゃんたちへ』

米子工業高等専門学校（鳥取県）

森田里奈（3年）／塩見美沙紀（3年）

悩みの感情とうまく付き合うためには、悩みを抱えず可視化してみる事が重要です。このアプリ『迷える子羊ちゃんたちへ』では、抱えているものを子羊に託し、悩みや問題を整理することができます。自分の悩みを理解するこて、心の安定を保つことができます。

『にゃにか言いたいことはないのか!?!』

高松工芸高等学校（香川県）

川松光瑠（1年）／成行花奈（1年）／岡内優里（1年）

場の空気を読むことや、うまく意見を伝えられない人のためのゲームを考案しました。様々な人と意見交換ができるため、考え方の視野を広げることができます。悩みを抱えず、友人や家族、会社などで共有することで、スムーズな社会生活を実現します。

『全国高校生ベジタブルコンテスト ～ベジコン～』

高松工芸高等学校（香川県）

小泉佑果（3年）／池上乃彩（3年）／川内鳳成（3年）

全国のデザイン科、農業科、調理科の高校生を対象とした、地元野菜を使った商品開発コンテストです。優秀作品は、実際に地元地域で製造され販売します。地元の野菜を通して、若者が地域で活発に活動できるきっかけをつくります。

『家族団楽囲んでテーブルクロス』

九州産業大学付属九州高等学校（福岡県）

中野恵（3年）／小林香央里（3年）／上尾恭沙（3年）

家族のコミュニケーションを取り戻すために、家族みんなで料理をすることができるテーブルクロスを考案しました。使う調理器具は「ホットプレート」。テーブルを囲んでみんなで協力して料理をつくることで、食卓を通し会話がうまれ、家族の団楽の機会を増やすことができます。

『信じるものを作り出そう』

九州産業大学付属九州高等学校（福岡県）

相良理沙（3年）／有吉あゆみ（3年）／佐伯優奈（3年）

日本人は信仰心を失いつつあります。宗教を身近に感じてもらえるように、お守りを電子化したリアクセサリー化します。宗教についての知識を得ることができ、若者の信仰離れを防ぎます。

『せんどプラン』

有田工業高等学校（佐賀県）

小山瑞月（3年）／篠崎春花（3年）／佐藤祥子（3年）

『せんど（send）プラン』とは自分でお葬式の計画や、大切な人との思い出づくりをサポートするサービスです。日常的に死を考えることで家族や友人にも素直に感謝の気持ちを伝え送ることができ、最期まで悔いのない人生を歩むことができます。

『旅学（とらべらーん）』

有田工業高等学校（佐賀県）

松尾理菜（3年）／御厨一十三（3年）／宮原菜々（3年）

高校生に『旅学』を義務付けます。この旅により、若いころから日本の地域について知ることができます。また、クラスごとに行った場所を共有することで、さらに多くの都道府県について知識を得ることができ、将来世界に通用する人材を育てることにつながります。

『履歴 SHOW!!』

有田工業高等学校（佐賀県）

高井良未波（3年）／御厨一十三（3年）／梅崎日奈子（3年）

『履歴 SHOW!!』は、就活生が自らのブースでプレゼンをおこないます。自分らしさを直接発信できるため、企業側も本当に求めている人材や、見せていなかった新しい人材を効率よく発見することができ、両者にとってメリットのある場をつくることができます。

『在来種を守れ!』

熊本県立第二高等学校（熊本県）

釜井梨乃（2年）／阿南暎海（2年）／大林遥奈（2年）

植物を身近に感じ、日本の在来植物を知ってもらうためのアプリを考案しました。様々な植物の情報や、植物豆知識を知ることができ、さらに在来植物を発見するとポイントをゲットできます。集めたポイントは植物の種と交換でき、育てる楽しみも体験できます。

『殺処分ゼロ ストレスフリーアニマルカフェ』

熊本県立第二高等学校（熊本県）

磯本茜（2年）／橋本実侑（2年）／坂口心（2年）

アニマルカフェの里親制度に寄付することで、動物支援に協力することができます。保護された動物はカフェの中で生活でき、さらにカフェのお客様も楽しむことができるので、動物も人間もストレスフリーで楽しみながら小さな命を救うことができます。

『新聞解説機能』

大分高等学校（大分県）
小柳春乃（2年）／衛藤幸恵（2年）／森裕希乃（1年）

新聞を読む機会を増やすため、声を使った解説機能を提案します。新聞の記事についている読み取り専用のバーコードを携帯で読み込むと解説を聞くことができます。読む暇がない人にとっては、手軽に新聞を聴くことができるので新聞を読む人が増加します。

『コネクトボックス』

佐土原高等学校（宮崎県）
海野聖香（2年）／緒方葵（2年）／熊澤史佳（2年）

『コネクトボックス』は、白紙の絵本を乗せたワゴン車が全国を巡回し、自分の悩みや出来事を描き、同じ悩みを持った人に続きを描いてもらいます。完結した物語は製本され、制作者全員に贈られます。視野が広がり、悩みの解決策や新しい見方が浮かんでくるでしょう。

『タイムカプセルハウスのすすめ』

佐土原高等学校（宮崎県）
成合由佳梨（2年）／谷山鮎美（2年）

住みなれた家を引っ越しなどで離れる時に、家をタイムカプセルに見立て手紙を隠します。手紙は次の家主が見つけて読まれることで、ひとつの家のなかの長い歴史や思い出を振り返ることができ、家を大切にする気持ちを育て、家それぞれの「文化」が守り継がれます。

『グルメグル～“FOODリサイクル”をはじめよう～』

隼人工業高等学校（鹿児島県）
高橋里奈（3年）／永井榛華（3年）／武田一成（3年）

食べられるのに捨てられてしまう食品を、必要としている人のもとへ届けるのがFOODリサイクル『グルメグル』です。家庭や農家、店舗を中心に残った食べ物を、身近な地域から世界まで情報公開することで、有効活用していきます。これによって無駄なゴミを削減できます。

『らぶかる ～Lovecal～』

隼人工業高等学校（鹿児島県）
中崎誠也（3年）／田中亚美（3年）／中内涼（3年）

地元を離れた人たちに、地元へ帰るきっかけをつくるアプリ『らぶかる』は、従来のご当地アプリや地域別のHPを統一し、新機能を追加した新たな地域振興型のアプリです。「らぶかるポイント」を貯めれば、特産物や特典をゲットできるなど、地元愛を醸成していきます。

『夢へのハチマキ』

昭和薬科大学附属高等学校（沖縄県）
又吉祐（2年）／又吉百音（2年）／仲里はるな（2年）

日本特有の文化を取り入れた『夢へのハチマキ』を考案しました。ファッション性を高め、目標にあわせたハチマキを締めることで、気持ちを切り替え、メリハリのある生活を過ごすことができます。休憩にはハチマキを使った体操でリフレッシュして夢実現を目指しましょう。



審査講評



小山薫堂

放送作家、脚本家 / 東北芸術工科大学教授 ◎審査員長

入賞されたみなさん、おめでとうございます。決勝大会に参加したみなさんは、935チームから勝ち上がった12チームだということを誇りにしてください。そして、このデザセンのために思いついたアイデアを、決して捨てないでほしいのです。自分でずっと持ち続けて、大学生になった時、大人になった時、お母さんやお父さんになった時、きっと何かにつながるきっかけになると信じてほしいのです。それくらい、アイデアは重要なものだ、僕は思っています。

2014年のデザセンにまた挑戦する方もいるかと思いますが、ひとつだけアドバイスしたいことがあります。

プレゼンテーションというのは、「伝えたいという情熱」と、「伝わっているかなと慮（おもんばか）る心」、この両方のバランスが大切です。自分が伝えたいと一方的に思いすぎても空回りしますし、伝わっている相手のことばかり考えても魂が抜けてしまいます。それを考えて、プレゼンテーションをしてほしいと思います。

これまでのプレゼンテーションには必ず「お芝居」が入っていますが、無理に入れることはありません。

その方が伝わらと思ったら役者になるつもりで真剣に芝居を勉強する必要がありますし、中途半端になるくらいなら無理にお芝居を入れる必要はないかもしれません。

来年は第21回大会、このデザセンはさらに大きくなるはず。何と韓国大会も計画されています。日本のデザセンが世界のデザセンになる…その第一歩を踏み出すのです。みなさんの提案の方法もこれまで以上にパワーアップして、今まで誰も見たことのないようなプレゼンテーションになることを期待しています。

●こやま・くんどう/代表作に、テレビ番組「カノッサの屈辱」「料理の鉄人」。2008年公開脚本を手がけた「おくりびと」が、第32回日本アカデミー賞最優秀脚本賞、第81回米アカデミー賞外国語部門賞獲得をはじめ、国内外で高い評価を受けた。活動分野は執筆以外にも多岐に渡り、熊本県地域プロジェクトアドバイザー、観光庁観光アドバイザー、下鴨茶寮主人、東北芸術工科大学デザイン工学部企画構想学科長、東京スマートドライバー発起人、ラジオパーソナリティ等。



赤池学

(株)ユニバーサルデザイン総合研究所 代表取締役所長

韓国的高校生が参画する2回目のデザセンとなった今回、グランプリを日韓高校生がダブル受賞す

るという、誰もが予想しないユニークな結果となった。もちろんこれは政治的な判断ではなく、そこには3つの理由がある。まず、「セックスチェンジ」という同一のデザインコンセプトを両校が図らずも提案してきたこと、第2は、その社会的意義を審査員一同が認めたこと、そして第3は、日韓併催による「国籍チェンジ」を含めたセックスチェンジイベントの実現をみんなが期待したからに他ならない。かつて私は、日本にバリアフリーデザインが持ち込まれたばかりの頃、「インスタントシニア」という企画を立ち上げた。健康者の手足に荷重やストレスをかけることで、疑似的に高齢者にチェンジし、商品や施設のアクセシビリティを体感するというプログラムである。頭だけでなく、体や心が異性やハンデを感じることは、言うまでもなく深い他者性の理解につながる。デザセンの韓国開催が予定されている今、そのオープニングイベントとして是非、日韓セックスチェンジを実現してほしいと思う。

もうひとつ、その実現を期待しているのは、「菌力デザイン」の提案である。これまでも、家紋や自治体ロゴのデザインブランド化の提案は数多くあったが、微生物や細菌の形状をデザイン化しようという発想は、元生物学者であるデザイナーの私も、持ち得なかった。墨田区にあるTシャツメーカーの老舗、久米繊維工業とは、「虫愛する北斎Tシャツ」などの商品化を通じて、とても仲良しである。「菌力デザインTシャツ」を、小山審査委員長や中山先生のお力を借りて、同社と共に商品化を目指してもらいたいと願っている。

●あかいけ・まなぶ/ユニバーサルデザインに基づく製品、施設、地域開発等を手がける。「生命地域主義」「千年持続学」を積極的に提唱し、地域ならではの産業技術、人材、地域資源による「ものづくり」プロジェクトの運営にも数多く参画。農林水産省 FOOD ACTION NIPPON AWARD や、キッズデザイン協議会キッズデザイン賞の審査委員長なども務める。



大宮エリー

作家、脚本家、映画監督、演出家

何かを一生懸命やるって、大事だ。大切だ。悶々としたり、不安だったり、先が見えなかったり。そもそも、「世のなかをよくするデザイン」だなんて、すごいテーマ。これ、政治にもなっちゃう。みんながこういうことを考えたら、もっと日本は世界は地球はよくなるのに。みんながハッピーに暮らせるのに。デザインって思うに、思いやりだと思うんですよね。相手のことを思うこと。愛すること。エゴではダメなんですよ。そういうことを感じるいい機会にみなさんだったのではないのでしょうか。プレゼンを聞いていて、みんなの思いやり、優しいまなざしが私の心に降り注ぎました。大会がすべてじゃなくて、これはただのきっかけで、そこで感じたこと、気づかされたことを、明日に、明後日に、1年後に、10年後に、生かして行ってほしいなと思いました。

それから、学生だからって、そういう関係ないってことも。同じ2013年生として、対等だったこと。責任だって対等。

アフターパーティーで、「どうして優勝できなかったんでしょうか、悔しい」と涙を流して私に理由を

聞いて来た女の子がいました。そのチームのみんなは張り裂けそうな顔をしていました。「講評も少なかったんです。どうしてでしょう」私は、あくまでも、私の感じたこと、を言いました。「おそらく、みんなも経験あると思うけれど、伝えたいこと、が複数あったり、何が言いたいのか漠然としている話を聞いた時って、なんて答えたらいいか、なんて感想を言っていかわからない時があるよね？」ダメだった、のではなくて、スポーツでいうと、投げた球が、相手が受け取りにくい球だったのではないかな？ と言いました。

女の子は、なるほど、と言って泣き止みました。お母さんとか、周りのひと、近所のひとに、ただ、一言でいうとこういうこと、って説明して反応を見るといいよとアドバイスしました。いい企画って、誰でもわかるから。先生しかわからない企画って、ダメだと思うんですよ。

世のなかをよくするデザインっていうのは、お母さんやお父さんや、もしくは友だちや、たまにしか会わない近所のおじさんが「へえ、それええやん!」とすぐに笑顔になる企画ですよ。審査員は、意外と身近にいる。

大会は来年までないけれど、日々大会だと思って、頭の体操、思いやりのトレーニングをしてみてください。私も、そんなこと言っという、最近、そういうの忘れてるなあ、できてないなあ、と気づかされました。毎日、きちんと登って来てくれる暖かい太陽に、さようならを言いながら切ない輝きを放ちながら星とバトンタッチする夕日に感謝しつつ、それを、実はこれが最高のデザインだなあ、と思

いつつ、ほんわか暮らしている私でした。。。

●おおみや・えりー/1975年大阪生まれ。主な著書、『生きるコト』、2巻、絵本「グミとさちこさん」、「思いを伝えるということ」、現在、サンデー毎日「なんとか生きてますッ」連載中。◇2012年渋谷PARCOにて個展。1万2千人を動員(その後、札幌、京都、仙台にて開催) ◇Ustreamにてオリジナルの番組「スナックエリー」をママとして配信(毎週月曜22:00) ◇J-WAVE 他 JFL5局ネット、「TOYOTA FRIDAY DRIVE WITH ELLIE」(毎週金曜日16:00)にて、パーソナリティー ◇TBS「アーティスト」歌番組の単独MC(毎週水曜日深夜0:28)



杉本誠司

(株)ニワゴン代表取締役社長

デザセンの面白さは、アイデアを発想し、そのアイデアを人に伝えることができるかを競い合う点にある。どんなに素晴らしいアイデアであっても伝わらなければアイデアとして成立すらし。ある意味当たり前なことではあるが、想像力と伝達力の両者が揃わないと“夢”は実現しないということにリアリティを持っている人は意外と少ない。デザセンのようなプログラムを通して、こうした体験ができる高校生たちは幸いである。彼らは、人を魅了する発想という課題に立ち向かい具体的

なアイデアに仕上げて箱に納める。さらに、箱に詰まったアイデアの面白さや素晴らしさを伝えるためのパフォーマンスを身にまとう。これらのプロセスを通して人の心を動かすのはひとりでは難しい、ならば2人以上で協力しあえばどうだろうか。デザセンにはいずれ社会に出る彼らが“夢”を叶えるために必要な手段のつくり方や考え方を競い合う楽しみのなかで学んでいけるようでもある。だからこそ、そこに関わる僕ら大人が最大級に注意しなければいけないのは、彼らを僕らの“既成概念”という型枠にはめてしまうことだし、大人に媚びるような企画が通らないデザセンでなければならぬのだろう。決勝大会に残った各チームの発想とパフォーマンスは卓越したでき栄えであったが、まだまだ審査員諸氏の想像を絶するレベルには到達していない。だからこそ、高校生諸君、もっと“とんがって”もっと“ぶっとべ”(笑)。

●すぎもと・せいじ/1967年3月31日生まれ。気象情報会社のウェザーニュースなどを経て、2003年ドワンゴに入社。モバイル向けのビジネスツールや電子書籍サイトなどの新規事業を担当し、メールポータルニワゴの立ち上げに携わる。2007年12月社長就任。動画サイト「niconico(ニコニコ動画)」の運営指揮にあたる。株式会社ドワンゴ広報部長、株式会社ドワンゴコンテンツ ニュースプラットフォーム部長。



竹内昌義

建築家／東北芸術工科大学教授

様々なアイデアを形にすることがデザインだとすると、デザインには大きく分けて、2つのことが必要である。なにをどうにかしようという「気づき」とそれをどうしたら、解決したり、形にするかという「方法」の2つがある。その行為がデザインなのだけれども、もっと大事なことがある。それはなんのために、デザインするかということ。デザインという、すぐにその2つ、「気づき」と「解決方法」の話になるけど、本当はもっと大切なのは「なんのため」かということだ。その答えは至ってシンプル。「幸せになるためだ」。じゃあ、幸せってなんだろう。人はどういう状態になれば、幸せなのだろうか。

そう単純ではないけど、考えてみよう。まず、「あなた自身は?」「あなたの家族は?」「あなたの学校は?」「あなたの住んでいる国、日本は?」そうやって広げていこう。日本はストレスの多い社会だと言われる。本当にそうだ。なんと、1年で3万人の人が自殺する。それにはそれなりの事情があるのだろうけど、少し多すぎはしないだろうか。もちろん、高校生一人ひとりにとっては、その人たちは関係のない人たちだろう。でも、そこに

は何らかの問題があるんだと思う。正直、社会全体のことはぼくにもどうしたらいいかわからない。でも、ぼくはぼくの関わっているデザインで誰かが少しでも「幸せ」になれたら、とてもうれしい。きっと高校生が考えるちょっとしたデザインも十分に友だちや誰かを「幸せ」にできる。ぼくらはそういうものを待っている。別にデザセンのための話だけではない。いつも考えてほしい。「あなたにとって幸せってなに?」

●たけうち・まさよし/東北芸術工科大学教授。(株)みかんぐみ共同主宰。ライブハウス「SHIBUYA-AX」、八代の保育園、2005年愛知万博ではトヨタグループ館、横浜開港150周年記念イベント会場、伊那東小学校を設計。さまざまな建築を手がける。東北芸術工科大学では、サスティナブルタウンのための10の提言、「未来の住宅 カーボンニュートラルの教科書」(バジリコ出版)でエコハウスについて研究し、実際に設計、建設をすすめた。近著に「原発と建築家」がある。



鄭國鉉

ソウルデザイン財団総監督

まず、デザセン2013の成功について改めてお祝いいたします。3年連続で審査委員として招待していただき、20年の歴史と経験を誇る大会にご一緒できたことを心から嬉しく思います。また、今

回は韓国からも多くのチームが応募し、そのうち2チームが決勝まで進出したことにより、韓国と日本の青少年たちが「デザインを通じた社会変化の価値」を共有できた、とても意義のある場であったと思います。

デザセンは青少年たちの健全な社会参加を促し、その時代の考えをデザインの思考を通して広げてみる場でもあります。参加した青少年たちの熱情と運営関係者たちのサポートで、長い時間を通して貴重な経験と資産が積み重なっていきます。その大事な資産が、私たちや社会を持続的に変化させる大きな原動力になることを信じています。近ごろ、私たちの周りには新しい「イシュー(issue=考えるべき課題・論点)」が突然現れ、話題の中心になる場合がよくあります。「イシュー」が社会をより創造的に変化させる推進力になり、また、色々な分野の専門家を通して新しい価値が生み出され、関連分野が融合していく現象が社会に広がっています。

今回出されたアイデアのなかには、まだ高校生らしい姿が見え隠れしますが、それ自体が社会を変化させる新しい挑戦であり、変化の出発点であることは紛れもない事実ですので、その価値はより大きいと思います。多様な社会環境を理解し、予想される問題について論じるプロセスを理解した時、すでに新しい「ソリューション(解決策)」は可視化されているのです。このように、小さくても可能性の大きな「ソリューション」が一つひとつ集まり、私、私たち、地域、社会、そして国家を変化させる大きなコミュニケーション力になると信じています。デザセンのこれからの10年、20年が、集团的知性価値と独創的文化を実践させるグローバルな大会となることを期待しています。

● Chung Kook-Hyun / 1977年サムスン電子入社、2008年サムスン電子デザイン経営センター副社長、2011年サムスンアートデザイン学校学長、2012年サムスン電子デザイナー経営センター常任顧問を経て、2013年より現職。ソウル経済ビジョン2020創造産業分課諮問委員長、国会デザインフォーラム運営委員も務める。2005年米 BusinessWeek 誌 “Stars of Asia” 25人に選定、2007年米インダストリアルデザイナー協会 “IDSA Special Award” を受賞。著書に「デザインで未来を経営する」(共同翻訳)、「未来のための投資、デザイン」(共同執筆)などがある。



中山ダイスケ

アーティスト、アートディレクター／東北芸術工科大学教授

今年は「男女を入れ替えてみる」という日韓両国からの同じテーマが並んで優勝しました。韓国の明知高校の案は「役目を取り替える」、そして日本の富士北稜高校の案は「服を取り替える」というものでしたが、どちらも「性」という題材に高校生らしく真面目に取り組んでいます。とかく、学校という場所では「男性」「女性」と区分けされ、それぞれの性に相応とされる学習と成長を求められるものです。しかしながら多様化する現実社会においては、その本質や役割に中間的な領域も増え、理想だと思われていた「性差別のない社会」の

実現には新しい問題も山積みです。

東大と高校の「マネージャー部」という提案にも、通常は裏方役であるマネージャーに脚光をあてる仕組みが提案されていますし、これまで当たり前だと思っていた社会の役割分担に対する若々しい発言が印象的な大会でした。多様化社会において大切なことは、互いの立場を知り、尊重し合うことです。そのためには、対角線上の相手を知る機会や、弱者の目線を体験できる仕組みがますます必要となってきます。

アイデアとは自分にとって違和感のあるものや、無関係であると思っていたものに出会った時に生まれるものです。自分の性に悩んだり、異性の不思議に気がついたり、大人の行動が理解できなかったり、社会のルールに矛盾を感じた時こそ、アイデアとデザインの出番です。ますます注意深く世界を見渡してみてください。

●なかやま・だいすけ/1968年生まれ。武蔵野美術大学でグラフィックデザインを学んだ後、コミュニケーションを主題に多様なインスタレーション作品を発表。1997年より6年間NYを拠点に発表をおこなう。1998年台北、2000年光州、2000年リヨンビエンナーレ日本代表。ファッションショーの演出、舞台美術、店舗のアートディレクションやグラフィックなど、カテゴリーを超えて活動している。



マエキタミヤコ

クリエイティブエージェンシー「サステナ」代表

みなさんをお願いします。「思いつく」と「考える」の両方をじっくり考えてください。「調べる」ことも大事ですが、調べる前に「自分の頭で考える」ことはもっと大事です。いままで誰も思いついてないこと、考えてないことを考えて、私たちに「こうしたほうがいいんじゃない?」と見せてください。大人の社会は迷っています。迷っているのは何も今にはじまったことじゃないですけど。テレビで毎日面白おかしい番組が目白押しで、切羽詰まっているようにはまったく見えないけれど、問題は山積みです。投票率が50%以下の選挙もたくさんあります。議会を傍聴したり、選挙を間近で観察すると、大人の社会が抱える問題が見えてきます。本当はたっぷり時間があるはずなのに、話し合っていません。戦争って、平和って、家族って、憲法って、法律って、人権って、国家って、国連って、権威って、共感って、民主主義って、なんだろう。エネルギーはどうやってつくろう、野菜は、タネは、米は、大豆は、医療は、お年寄りは、合意形成は、どうすればいいだろう。自分の言いたいことを言い放つだけでなく、自分と違う意見を広い心で受け止め、鵜呑みでも受け売りでも過剰に影響

されるのではなく、その価値を冷静に評価して判断する目を持つにはどうしたらよいだろう。わからないことはどうやって考えようか。誰かに聞くその前に、まず自分たちだけで考えてみて、それを忘れないように書きとめてから、誰かに聞いてみよう。自分の考えが他の人や情報の影響を受けて変わる、その瞬間を冷静に観察して、自分で評価する練習を重ねよう。高校生はもう大人。デザインには歴史と哲学が必要。デザセンが国際的になる今年、どうか痛快で独創的な提案で、私たちの既成概念をノックアウトしてください。

●まききた・みやこ/クリエイティブエージェンシー「サステナ」代表。コピーライター、クリエイティブディレクターとして、97年よりNGOの広告に取り組み、2002年にソーシャルクリエイティブエージェンシー「サステナ」を設立。「エココロ」を通し日々世のなかのエコソフトに奔走中。「100万人のキャンドルナイト」呼びかけ人代表・幹事、「ほっとけない世界のまずしさ」2005年キャンペーン実行委員。京都造形芸術大学・東北芸術工科大学客員教授。「フードマイレージ」キャンペーン、「いきものみつけ」「エネシフジャパン」「グリーンアクティブ、緑の日本」「エコ議員つうしんぼ」「発禁新聞」「サステナ・クラウドファンディング」「デモクラTV・えっそれは知らなかったジャーナル」をてがける。デモクラTVレギュラーコメンテーター。

入賞校の先生方の声



富士北稜高等学校
菅沼雄介 教諭
Yusuke Suganuma

建築デザイン系列の教諭として、建築を問題解決のツールとして提案できる人間を育てたいと考えて、日々の指導に取り組んでいます。生徒とのやり取りのなかで感じるのは、自ら問いを立てることに対するためらいです。問題は正解とセットで、誰から与えられるものであるという、受身的で固定的な思考の枠組みを外すところが、最も時間とエネルギーを要する部分かもしれません。「明日の社会を見つめ、明日の世界を創造する」というテーマで、問題発見・課題解決を図るといってデザインは、批判的な思考力を養うのに格好の機会となっています。3人1組で話し合い、行き詰まり、思考と判断を積み重ね、プレゼンテーションをおこなうという作品づくりは、最小限のコミュニケーションづくりであるともいえます。そんな6月からの小さな社会づくりを通じて、自分たちが明日の世界を創造できるかもしれないという希望を持たせることができたならば、それこそが最大の成果であると考えます。



羽咋工業高等学校
向井章 教諭
Akira Mukai

本校からは10年ぶり2回目の決勝大会出場になります。念願の山形行きに感動を覚えました。韓国チームも参加したこの大会に参加でき、光栄に思います。応募件数も1,000件近くに増え、20回と歴史を歩んできたこの大会。「デザイン」という言葉の広義での意味を理解する上で、このデザインは意義のある大会です。毎年、応募をしています。毎年、生徒も私も悩みます。アイデア、発想、沈黙の時間、妥協しない戦い、準備段階を含みすべてにおいて考え、苦しみ、話し合います。決勝大会が決まってからは、この短い時間をプレゼンテーションにすべてをぶつけ、ひとつにものをチームで諦めず完成させるためにやり遂げる。すべてが有意義な時間でした。生徒は大きく成長します。その様子を身近で感じられることに喜びを感じます。デザインと高校生を育ててくれるこの大会、大好きです。大会事務局・サポートスタッフの皆さんありがとうございました。心から感謝しています。



ミョンジ
明知高等学校
イ・ソジョン 教諭
Lee So-Jung

これまでアイデアをデザインするという機会がなかったので、とても新しい経験をすることができました。日常の中で見逃しやすいことを、高校生の視点で見て、社会の発展とつなげて考えることに大きな意義があるのだと思います。プレゼンテーションを準備する過程を通じて、協力と配慮の姿勢を学ぶことができ、大勢の人たちの前で自分の意見を伝えることの難しさを学ぶ貴重な時間になりました。また、多くの人たちが協力しながら大会が運営されるのを見て、大きな感動を受けました。



淀商業高等学校
安東裕二 教諭
Yuji Ando

「淀商3年ぶり3回目の出場」は来春転勤を控えた最後のデザ戦…と意気込むのは私だけ。のんびり生徒のプレゼンは完成程遠いまま山形へ…(笑)。さらに、伊丹空港行バスに生徒が乗り遅れる遅刻に激怒。沈んだ空気の仙台空港→芸工大道中…復興跡を眺めて一転、元気をもらった。まだ間に合う…。しかし、リハは台詞が覚えられず悔し涙の練習放棄に唖然。祈るしかない本番は、発表順だけが救いのラッキー7(笑)。そんな私たちに、大学生・市民賞のW受賞は、あまりにもラッキーなご褒美。“鬼首”がこれほど多くの方に支持していただき、生徒は大きな財産を得たことだろう。台詞通り、鬼の効果は絶大(笑)。須貝さんに助けられ、安孫子さんには12年前を弄られ(笑)、高島さん率いるスタッフには大変お世話になりました。最後に、「次も淀サポートで!」と言ってくれた小笠原さん(涙)、秋山さん。感謝の言葉が見つかりません。本当にありがとうございました。



東根工業高等学校
長澤英一郎 教諭
Eiichiro Nagasawa

本校は今年度で閉校となるため、最後に東根工業高等学校の名前でデザセン決勝大会に出よう!をスローガンとし6月から取り組みをはじめ、奇跡的に5年ぶりの決勝大会の切符を手に入れることができました。アプリとか政治とか環境問題とか戦争とか…そんな難しいことは考えないで気づきそうに気づかないコトに気づけ!と高校生の着眼点を大事にスタートしていきました。入賞の知らせを受けたあの3人は、これから始まる地獄の忙しさも知らず嬉しさでいっぱい…私は不安な気持ちでいっぱい…。10月に入ると生徒会を担当している私を待っているのは文化祭の準備。時間が無い状況のなかでのシナリオ提出などで自分自身ももう5人ほしいと思ったくらいでした。シナリオは3人に渡し、覚えておくように伝え、文化祭を終わらせるまではまったく練習ができませんでした。デザセンの1週間前に文化祭が無事に終了し、やっとデザセンモードに切り替え。プレゼンの流れ・音楽・踊り・歌などやらなければいけないことを見事に週間でマスターしてくれました。「菌」というテーマをいまひとつデザインしきれなかった不完全燃焼さが指導者としての力量が足りなかったと反省しています。しかし、彼女たちなりに精一杯頑張った本校の有終の美を見事に飾ってくれたと思います。大会事務局はじめ、学生スタッフの皆様は心より感謝申し上げます。毎年言っていますが、来年も逢いましょう!



有田工業高等学校
東加代子 教諭
Kayoko Higashi

決勝進出という、いわば「企画のお墨付き」をもらっているのに、生徒たちには提案の具体性や自信がほとんどありませんでした。プレゼンの準備どころか、まずは「自分探し」からはじめたようです。ベテランの先生を訪ね歩き、関係部署に取材に行ったら本を読む…。悟りを求める修験僧のように、この頃が生徒には一番辛かったと思います。ベストアンサーなんて結局誰も持っていない、己でこしらえるしかないと思いついた頃から、やっとプレゼン準備に本腰が入りました。それが旅立つ3日前です。それからのスリリングで猛烈な練習の期間は、一番の思い出になったでしょう。確かに、あの数日間の成長ぶりは感涙のものでした。しかし、答えを求めて進むほどに混乱する、ちっとも快感を得られなかったあの日々こそ、成長の肥やしだったと思います。私も、どんな支援・指導がいいのか手探りでしたが、生徒のひたむきさに勇気づけられる日々となりました。



御殿場高等学校
坂本泰三 教諭
Taizo Sakamoto

今回、私は本大会出場が決してからデザセンに関わるようになったので、最初は何からはじめたらよいのか手探りでしたが、進めていくうちにデザインの本質を肌で感じられるようになり、結果としては賞までいただき、とても充実していました。できればまた来年出場できることを望んでいます。今回、一緒に参加した生徒は今までこのような大舞台を経験していない生徒であり、私もこのような大会の指導は未経験であったので、本当に本大会でプレゼンができるのだろうかという不安もありましたが、本大会を通じて私も生徒も成長したような気がします。当日は学校の文化祭と重なっていたのが残念でした。それを犠牲にして出場するモチベーションを生徒が持つように苦慮しました。デザインを指導する上では、このデザセンという大会は最良の教材です。ただの知識ではなく、体験としてデザインを学べるよい機会です。今後とも決勝大会進出を目指して取り組んでいきたいと思っています。



伊東高等学校城ヶ崎分校
大津忍 教諭
Shinobu Otsu

デザセンに出場させていただいて、今年は7回目になりました。年間を通じた授業のなかでも、デザセンへの出場は大きな目標であり、生徒の励みにもなっています。テーマを考えることの難しさに関してはあまり感じたことがなく、むしろ毎年楽しみながら取り組んでいます。分校という小規模、少人数制の授業ではテーマもみんなで考え、誰がどの提案を担当するかというのもくじ引きのような感覚で決まります。そのなかでどの提案が選ばれたにしても出場できるのは3人だけというのが唯一残念な点です。みんなを決勝大会に連れて行ければという思いが残りますが、選ばれなかった生徒にとっても決勝大会で代表の3人がいいプレゼンをするのが自分たちの誇りであり、学校の誇りでもあります。大会が終わってチームサポートの学生たちが手を振ってバスを追いかけてくる光景を見ると、また来年もという気持ちが湧いてきます。ありがとうございました。



東大和高等学校
櫻田万里 教諭
Mari Sakurada

私は普通高校で、デザインの面白さを伝えることに苦戦するなか、デザセンの大会趣旨に深く共感してきました。今の生徒は「デザインをデザイン」しがちです。4月に私が着任した東大和の生徒たちは、「デザイン」なんてまったく知らない、でも目的に向かってまっしぐらなパワーのある生徒たちでした。ここなら、デザセンにチャレンジできると感じ、18年ぶりに授業課題として取り組んだ今回の応募でした。まさかの決勝大会出場の連絡には、生徒ばかりか私も弱腰でしたが、私が面白いと感じた生徒たちに、審査員の先生方も何かを感じてくださったのに違いないと信じておきました。何よりも、事務局や学生スタッフのみなさんがつくる素晴らしい環境を生徒たちに与えたいと思いました。決勝大会には、参加したものしか体験できないミラクルがあります。デザセンは、デザインを高校生に考えさせることができる希少な大会です。2回からの新たな幕開けに期待しています。



科学技術高等学校
藤井邦光 教諭
Kunimitsu Fujii

生徒たちにとって、この異種格闘技戦は貴重な体験となりました。今回応募させていただいた生徒たちは、建築デザイン科で建築デザインを学び、さらに建築研究部という部活動で年間を通して休まず建築コンペに挑戦しています。デザセンは建築を学ぶ生徒同士で一定条件の基に競う建築コンペと違い、商業や情報などといった違うものを学ぶ生徒との、何でもアリのデザインを競う、まさに異種格闘技戦です。生徒たちは、このデザセンに参加するプロセスのなかで凄まじい成長を見せてくれました。人前で話すことを避けてきた生徒が堂々とプレゼンをしたということだけでも驚きましたが、上位入賞を果たせず、涙を流した生徒たちの姿を見るとは思いませんでした。この悔しさを次のデザイン活動に活かしていってくれと信じています。最後に、この貴重な体験をさせていただいた皆様と生徒たちに細やかな心配りをさせていただいた学生サポートスタッフに心からお礼申し上げます。



六郷工科高等学校
廣川賢 教諭
Masaru Hirokawa

デザイン選手権に参加させていただいて2年目。2大会連続で決勝大会に参加できたことを心から嬉しく思います。デザセン2013で、私どもは前大会が終わった直後から、昨年初出場した先輩たちの背中を追いかけはじめました。プレッシャーもあったと思いますが、「日頃の学習の成果」という言葉では語れないほどに頭を使い、体を動かし、デザインを楽しみ、たくさんの方の支えをいただきました。一生の財産にしてほしいです。私も、教員として、そしてデザインに関わるひとりの人間として、生徒と共に目標に向かってデザインの活動ができる喜びを感じることができました。そして、その過程ではもちろん、大きな舞台を用意していただき、当日またひとつ成長した姿を見ることができる。これ以上の感動はありません。事務局、スタッフの方々、ご観覧いただいたお客さんをはじめとして最高の場所を提供していただいたすべての皆様へ、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。



ホンチョン
洪川高等学校
カン・ナムイ 教諭
Kang Nam-I

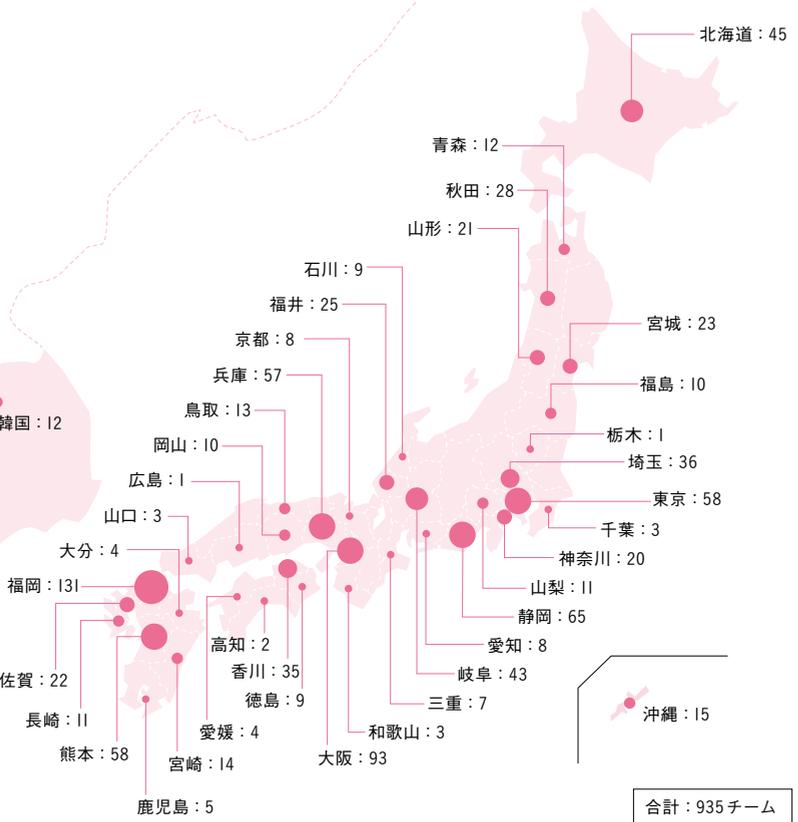
教師としてこのような大規模の大会に参加することははじめてでしたので、準備不足な点もありましたが、より広い視野を持つことができるようになり、個人的にもとても意味がある時間を過ごすことができました。予想もしていなかった「決勝大会進出」という発表に、早々にして準備をはじめたのですが、経験不足を補うための試行錯誤を経て、少しずつ形になっていく喜びはとても大きなものでした。大会の準備から出発、滞在、帰国まで細かく気をつけて支援していただいた主催側の労に驚きましたし、何より学生スタッフの信頼感あるサポート体制には学ぶことが多かったです。そして最も大きな収穫は、結果ではなく、本校の生徒が経験した大舞台で感じた「自信」と「新しいものの発見」だと思っています。

大会資料1 データでキャッチ、高校生の参加状況。

回を重ねる毎に、確かな広がりを見せてきているデザイン選手権大会。データをもとに、参加した高校生の全体像を探ってみました。

● 応募チーム数

記念すべき第20回大会には、国内では過去最多となる97校(38都道府県)から、923チームの応募がありました。韓国から11校・12チームの応募も加え、応募チーム数の合計は935チーム。韓国からの2チームが決勝大会に進出しました。今年も2,500人を超える高校生が取り組んでくれたこととなります。



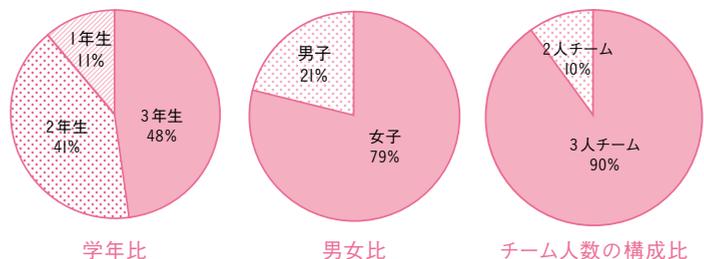
● 特に多く寄せられたテーマ

- 1位 人間関係やコミュニケーションに関するもの
- 2位 学校生活や勉強など教育に関するもの
↳ 身体や心の健康、医療・福祉に関するもの
- 4位 自己管理や職業など、自己実現・自立に関するもの
- 5位 新しい製品や技術的なアイデアに関するもの
- 6位 食事や食品、農業などに関するもの
- 7位 自然保護や環境問題などエコロジーに関するもの
↳ まちの活性化やコミュニティなど地域社会に関するもの
- 9位 防災や防犯など、安全・安心に関するもの
- 10位 自転車や通学環境など、交通システムに関するもの

年度によって順位の変動はありますが、同じテーマでもいくつかの切り口があるため、それほど大きな格差はありません。あまり傾向にとらわれずに、「自分がいちばん関心のあるテーマ」にじっくり取り組むことが大切です。

● 学年比・男女比・チーム人数の構成比

2011年度から2人のチームで応募できるようになりましたが、2人チームは大幅に減少し、90%が3人チームとなりました。学年別では2年生の応募が増え、全体の40%を超えました。男女比では女子の比率が年々高まり、80%に迫る勢いです。「がんばれ、男子！」



大会資料2 第20回大会募集要項

この募集要項は、2013年に開催した第20回大会のものです。ご応募いただく際には、最新の募集要項をご確認ください。

★ テーマ

『明日の社会を見つめ、明日の世界を創造する』
高校生の視点で、社会や暮らしのなかから問題・課題を見つけ、その解決方法をわかりやすく提案してください。

★ 応募資格

同じ高校に通う2名もしくは3名で1チームとし、1チーム・1提案で応募してください。

- 1校から何チームでも応募できます。
- チームを構成するメンバーが、1名でも異なれば別のチームとみなします。これにより、1人で複数の応募ができます。
- パネルには以下の内容を必ず記載してください。
*提案のタイトル
*見つけた問題の現状(なぜ問題となっているのか)
*具体的な問題の解決方法
*解決方法を実施すると、社会はどう変わるか
これらの内容を含んだ上で、自由に表現してください。
- パネルには折れ曲がらない程度に厚みのあるもの(イラストボードやスチレンボードなど)を使用してください。
- 立体物を貼付したもの、出力したままのロール紙、水張りした木製パネルなどは不可とします。

★ 応募方法

下記の提出物を受付期間内に大会事務局に到着するようにお送りください。

[一次審査]

1. 応募用紙
大会ホームページから「応募用紙(PDF)」を出力し、すべての欄に記入してください。
2. 企画書
大会ホームページから「企画書フォーマット(PDF)」を出力し、提案の内容について項目に沿って記入してください。

応募用紙を企画書の上に重ね、左上をホチキス留めし

て、受付期間内に大会事務局に到着するよう郵送でお送りください。

受付期間: 2013年4月1日(月)~7月3日(水)当日消印有効 ※ 応募用紙・企画書は「A4サイズ」の用紙に印刷してください。

[二次審査](一次審査通過チームのみ)

- 提案の内容をパネルにわかりやすく表現してください。文章・イラスト・図表・写真など表現方法は自由です。
- パネルは、A2サイズ(縦420mm×横594mm)2枚(片面)を横位置で使用してください。
- パネルには以下の内容を必ず記載してください。
*提案のタイトル
*見つけた問題の現状(なぜ問題となっているのか)
*具体的な問題の解決方法
*解決方法を実施すると、社会はどう変わるか
これらの内容を含んだ上で、自由に表現してください。
- パネルには折れ曲がらない程度に厚みのあるもの(イラストボードやスチレンボードなど)を使用してください。
- 立体物を貼付したもの、出力したままのロール紙、水張りした木製パネルなどは不可とします。

受付期間: 一次審査結果通知日~ 2013年8月28日(水)当日消印有効

★ 審査

1. 応募された「企画書」で一次審査をおこないます。審査結果は応募校の指導教員宛に7月16日(火)頃に発送し、一次審査通過チームには二次審査についての詳しい要項を同封いたします。
2. 一次審査通過チームから提出された「提案パネル」

で二次審査をおこない、入賞12チーム、入選30チームを選びます。入賞12チームには決勝大会(最終審査)の詳しい要項をお送りいたします。審査結果は9月6日(金)頃に大会ホームページ上でも発表します。

3. 入賞12チームは、東北芸術工科大学を会場としておこなう決勝大会(最終審査)で、提案の内容を具体的にプレゼンテーションします。制限時間は7分です。発表後、審査員との質疑応答があります。

開催日: 2013年10月27日(日) ※25日(金)はガイダンス、26日(土)はリハーサルとなります。

会場: 東北芸術工科大学(山形県山形市)

- 表彰式は、大会当日の公開プレゼンテーション終了後、同会場でおこないます。
- プレゼンテーションの準備費用として、1チームにつき2万円を助成します。
- 選手3名と引率教員1名の交通費・宿泊費は、大会事務局が負担します。

★ 審査基準

以下の「デザイン力」を審査し、総合的に優れた提案を評価します。

- 問題発見力、分析力
- 発想力、企画・構想力、独創性
- 表現力、説得力
- 実現可能性

★ 表彰

優勝 [文部科学大臣賞] (1チーム)
……………優勝旗、トロフィー、賞状、副賞 (24万円相当)
準優勝 (1チーム) ……トロフィー、賞状、副賞 (12万円相当)

第三位 (1チーム)
……………トロフィー、賞状、副賞 (6万円相当)

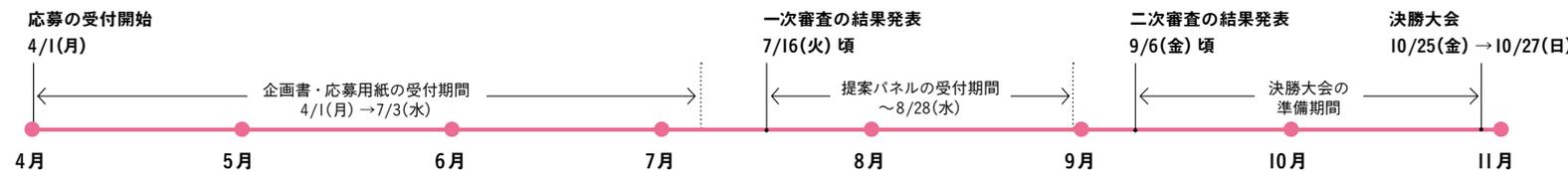
市民賞 (1チーム) ……………賞状、副賞 (3万円相当)
大学生賞 (1チーム) ……………賞状、副賞 (3万円相当)
高校生賞 (1チーム) ……………賞状、副賞 (3万円相当)
入賞 (6~9チーム) ……………賞状、副賞 (1万5千円相当)
入選 (30チーム) ……………賞状
学校賞 (入賞・入選を果たした高校)
……………賞状、副賞 (教育費として1万円相当)

※その他、特別賞が設定される場合もあります。

上記の表彰とは別に、商品化・サービス化の実現可能性を検討します。

★ 応募に関する留意事項

- 提案内容は、応募者自身のオリジナルに限ります。
- 提出物の送付にかかる費用はすべて応募者でご負担ください。また送付時に破損などが発生しても主催者は一切の責任を負いません。厳重に梱包してお送りください。
- 提案内容に関するすべての知的財産権は応募者にあります。ただし、入賞・入選提案を大会ホームページ、または主催者が発行する各種媒体で発表するほか、報道機関に対しプレスリリースなどで受賞情報を提供します。なお、商品化などに発展した際の権利関係は、実態に合わせて関係者間で協議する場合があります。
- 募集要項の掲載事項を諸事情により変更する場合がありますので、予めご了承ください。





デザセン2013 REVIEW

全国高等学校デザイン選手権大会事務局

〒990-9530 山形県山形市上桜田3-4-5 東北芸術工科大学

TEL : 023-627-2139 FAX : 023-627-2185

EMAIL : dezasen@aga.tuad.ac.jp

URL : <http://www.tuad.ac.jp/dezasen/>



TOHOKU UNIVERSITY
OF ART & DESIGN

過去大会の報告書、パンフレット、プレゼンテーションを収録したDVDを
無償配布しておりますので、ご希望の方は大会事務局までお問い合わせください。